

# 空想傾性 (Fantasy Proneness) 研究の動向と展望

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程2年

山崎 有望

## 要旨

空想傾性とは空想への広く深い没入に関連する一連の経験を表す概念である。空想傾性の高い人々は想像上の物語や鮮明な記憶、夢など豊かな内的世界に注意を向け、空想に多くの時間を費やす。従来の空想傾性研究の多くは自己報告式の質問紙を用いて、統合失調症や解離のような精神的病理との関係を示してきた。しかし、生態学的基盤や先天的要因など空想傾性の発生メカニズムについて、ほとんど明らかになっていない。本論文では、空想傾性という概念について改めて捉え直すために、これまでの空想研究及び空想傾性研究を概括し、空想傾性に関連する各心理特性について説明する。そして空想傾性を捉えるための従来の理論「素因-ストレスモデル」を補完する新たな理論的枠組みを提唱する。最後に現在の空想傾性研究の問題点について議論し、今後を展望する。空想傾性は、適応的な側面と不適応的な側面という両面性を有している。したがって、今後も引き続きその方向を左右する媒介要因の検討を進め、空想傾性者が精神病理などのネガティブな方向に進んでしまった場合も、自ら再びポジティブな方向へと動機付ける要因について調査する必要がある。

キーワード：空想傾性，感覚処理感受性，心的境界理論，感受性差仮説，ポジティブ心理学

## 1. 空想研究

### 1-1. 空想の定義

空想 (fantasy) とは現前する現実世界とは別の虚構世界を表象させる精神活動あるいはその産物をいう (中島他, 1999)。子どもの発達において、空想が大きな役割を果たしていることはよく知られている。例えば小さな子どもが、絵本の中の世界や夢の世界を自分が実際にみた光景と統合し作り上げる「ごっこ遊び」も、それらの世界を外在化した「お絵かき遊び」も、子ども同士の喧嘩や言い争いに負けないように何回も行う喧嘩の「シミュレーシ

ョン」も、全て空想という行為によって提供され、社会心理的発達において重要な心理的活動である。そしてこれらの現象は大人になっても消失することはなく、形を変えながらも私たちの日常生活に絶えず彩りを与えている。

しかし、空想など心的イメージが深く関わる現象は極めて主観的で私的な行為であるため、誰もが共有できるような定義付けをすることがとても困難である。そのため、これまでの空想概念は類似した概念（想像、幻想、妄想、思考、回想、夢、白日夢など）との相違によって定義されることが多かった（松井・小玉，2003）。だがそれらの定義もまた研究者間では一致していない。

例えば、空想と類似した概念として白日夢ないし白昼夢（daydream）がある。白日夢とは覚醒時に体験する夢に類似した意識状態を指す。Singer（1975 秋山・小山訳 1981）のように空想と白日夢を区別しないで扱うことが多い一方で、この2つを異なる現象として見なす考え方もある。中島他（1999）は白日夢を、夢と同様に検閲が弱く願望充足的で自由に展開されるが、夢よりも象徴性が少なく直截的で、空想よりも生々しい現実感があるが、自分の意思で現実世界に戻ってくることができるため、病的なものではないと説明している。また、近藤（1986）は思考と白日夢について、その行為の出発点において明確な課題意識によって方向付けられているかどうかで区別している。すなわち、白日夢は「現在直面している課題によって方向づけられた思考が一時中断して、それとは無関係な別な思考がおこること」であり、注意を逸らすものに対する無意識的な条件反応によって生起する現象であるのに対し、思考は「主体が直面する課題に関連してその解決に必要な材料を選択的・操作的に引き出して構造化する過程」とされている（近藤，1986）。そして、白日夢の下位概念として空想と幻想があると考えており、「想念の流れに多少とも自我による操作的な方向付けが加わり、話の筋書きが決定される場合」を空想とし、「無統制で相互に何の関連もないイメージが次から次へと湧き出てきて、観念や感情がそれに翻弄されるように付き従う、意識の流れ全体が条件反動的なもの」を幻想と位置付けている。

Singer（1975 秋山・小山訳 1981）はfantasyではなくdaydreamという言葉を用いて精力的に研究を行っている。そしてdaydreamを「自分自身の基本的な身体的・精神的課題から注意を逸らし、外界の対象を直接見たり聞いたりすることから逃れて、内部刺激に生じた一連の私的な反応に注意を向けること」としている。このdaydream研究の系譜は、注意持続的観点から現在のマインドワンダリング研究に引き継がれている。マインドワンダリング（mind wandering）とは「現在行っている課題や外的な環境の出来事から注意が逸れて自発的な思考を行う現象」のことをいう（Smallwood & Schooler, 2015）。Smallwood & Schooler（2006）は心理学の領域で扱われてきた、現在行っている課題や状況に関係のない内的な思考に関する様々な研究をまとめ、それらの研究対象を包括的にマインドワンダリングと名付けることを提案した。そうした事情もあり、研究者によってマインドワンダリングという現

象としてみなす範囲は異なっており、厳密には一致していない。マインドワンダリングは非意図的に生じるものと想定された研究が多く、「意図性」という観点が見過ごされてきたが、近年の研究では意図的なマインドワンダリングと非意図的なマインドワンダリングを区別して検討していくことの重要性が主張されており (Seli, Risko, & Smilek, 2016)、本邦では山岡・湯川 (2019) によって「日本語版意図的/非意図的マインドワンダリング傾向尺度」が作成されている。

また、我々が将来の目標を思い描く場面に限定し、その想像の仕方の具体性について焦点を当てている定義付けもある。Oettingen & Mayer (2002) によると、予期 (expectation) とは「将来の出来事の実現可能性についての判断を伴う、将来についての具体的な考え方であり、目標に関わる様々な要因を考慮して、目標を達成できるか否かについて考えること」と定義される。一方、空想を「将来についての漠然としたポジティブ (ネガティブ) なイメージであり、目標を達成した (していない) 理想的な (否定的な) 自分について思い描くこと」と定義している。

さらに、空想と妄想について、現実との矛盾に直面した際に改変・消失するかどうかという観点からの定義付けもある。空想が内容や方向性についてある程度コントロール可能な行為であるのに対し、現実にそぐわないにもかかわらず現実検討能力が障害されているためにそれと認識できず、現実に即したように改変することもできない信念を妄想 (delusion) と呼ぶ (中島他, 1999)。また、妄想は信念の内容だけでなくそのような信念を持つに至った認識、思考、判断過程の特徴も問題とする。

以上の内容を整理するために、松岡 (2000) がまとめた心的イメージ現象の諸特徴を一部改変し、マインドワンダリングを加えたものが表1である。また、指向性や内容による定義付けのほかに、空想を意識状態の観点から位置付けることもある。例えば、Hartman (2010) は夢から思考を睡眠-覚醒スペクトラム上の両端に位置付け、その中間の意識状態として空想や白日夢を捉えており、この位置付けに基づき、Van der Kloet, Merckel back, Giesbrect, & Broers. (2015) によって精緻化されたモデルが提唱されている (図1)。

このように、どのような観点から空想の位置付けを行うかは研究者によって異なっており、様々な空想の定義が混在している。そこで松井・小玉 (2003) は、大多数の人々の空想概念に対する認識について調べるため、大学生を対象に多次元尺度構成法によって調査した。その結果、空想とは「どちらかと言えば健康的な行為であり、コントロール可能だが意識的にも無意識的にも行っているもので、自分にとって有益である」行為であり、その内容は「非現実的で願望が反映されており、訂正可能およびコントロール可能なもの」とであると、人々は認識していることが明らかになっている。

表1 心的イメージ現象の特徴（松岡（2000）の内容を筆者が一部改変し作成）

分類	イメージ名	イメージの特徴	経験の一般性	定位	鮮明性	現実性吟味
覚醒時の認知活動において生じるイメージ現象	思考イメージ (thought imagery)	日常生活の中で最も一般的に経験されるイメージ。記憶の想起として浮かび上がる場合は記憶イメージ、新たに創出された内容を含む場合は想像イメージとして区別される。	誰にでも一般的に経験される	通常内的	多様	○
	マインドワンダリング (mind wandering)	現在行っている課題や外的な環境の出来事から注意を逸らし、自発的に思考活動をする中で表出されるイメージ。	誰にでも一般的に経験される	通常内的	多様	○
	空想 (fantasy) 白日夢 (daydream)	意図的統制が比較的弱い状態で進行するイメージ。特に夢様に展開されるとき白日夢と呼ばれることがあるが、両者の区別はそれほど明確ではない。	誰にでも一般的に経験される	通常内的	多様	ある程度○
	妄想 (delusion)	根拠のない主観に基づき、作りあげられた誤った信念。論理や現実との矛盾に直面した際、空想や白日夢とは異なり、現実と即した内容の訂正や改変することができないなど意図的統制に問題がある。	特殊	通常内的	鮮明	×
	幻覚 (hallucination)	客観的実在性が当然のこととして想定されている知覚様のイメージ。精神疾患の兆候として現れることがあるが、睡眠、薬物摂取、感覚遮断の条件下では健常人でも経験する。	特殊	内的にも外的にも定位	鮮明	×
睡眠時のイメージ現象	入眠時像 (hypnagogic imagery) 出眠時像 (hypnopompic imagery)	覚醒と睡眠の間のもどろみの中で出現する鮮明なイメージ。光斑や閃光、幾何学模様の無意味イメージのほかに、顔や風景などの有意味イメージが現れる場合がある。	少数の人にまれに	外的	鮮明	○
	夢 (dream)	睡眠状態において体験されるイメージ。	誰にでも一般的に経験される	外的	多様	×

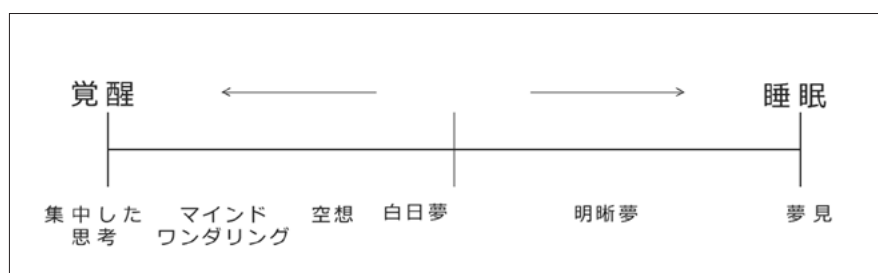


図1 睡眠—覚醒スペクトラム上での空想を含む意識状態の位置関係  
 (Van der Kloet et al. (2015) の内容を筆者が一部改変し作成)

## 1-2. 空想の機能に関する代表的な仮説

空想という行為が心理学および精神医学の分野において、最初に研究対象とされたのは、主として精神分析による臨床的研究においてであった(松井・小玉, 2001)。精神分析療法における最初の患者となったAnna, O. が自らの白日夢を「個人劇場」と表現して以来、空想は「心の劇場」と呼ばれた。空想に関する研究史を要約すると以下のようなになる。まず精神分析的な観点から端を発した空想研究だが、次第に並行して精神分析家以外の研究心理学者たちの間ではイメージを測定することが議論の中心となっていった。1960年代以降になるとSinger (1975 秋山・小山訳 1981) などの認知心理学者達によって、多面的で肯定的な空想へのアプローチが試みられるようになり、その流れは再び臨床心理学の領域へ広がるようになった。近年では、心的機能のポジティブな側面に着目するポジティブ心理学に対する関心が高まり、臨床領域における心的イメージを用いた認知療法的な介入イメージ研究にも影響を与えている(川原, 2017)。例えばPTSDにおけるトラウマイメージに暴露させる介入研究からポジティブイメージを用いた介入研究へと変遷している。次に、空想の機能に関する代表的な仮説を紹介する。

### Freudと空想

精神分析学者Freud (1908 道籟・西脇・福田 2007) によると、空想とは「それが想像行為、すなわち自分が創り上げた虚構の世界であることを空想者がわかっている心的過程」である。Freud (1908 道籟他訳 2007) は、空想の原動力として無意識的な願望(欲望)の存在を前提とし、空想の果たす役割を欲求の充足という観点で説明する「衝動充足機能説」を提言した。そしてこの定義は今日に至るまで精神分析的な定義の基準となっている(Person, 1995 浅尾・岡訳 1997)。

### Singerと空想

Singer (1975 秋山・小山訳 1981) は「白日夢(空想)は自分自身のある基本的な身体的・精神的課題から注意をそらし、あるいは外界の対象を直接見たり聞いたりすることから逃れて、内部刺激によって生じた一連の私的な反応に注意を向ける行為」と定義した。そして、従来の精神分析的な観点が焦点を当てていた病理的側面よりも、むしろ生産的・適応的働きについて、様々な年齢層、性別、文化、社会階層などの文脈に考慮しながら40年以上に渡って研究を続けている。その一連の研究のなかで「白日夢尺度」という質問紙を作成し、白日夢が「不安と混乱の白日夢」「罪悪感と否定感情の白日夢」「肯定的で生氣のある白日夢」に分類されることを示した。そのなかでより肯定的な内容の白日夢や空想を報告する人は、自分に対して楽しい環境を作り出し、多様な内部刺激をつくる手段を工夫しているため長時間の静寂にも耐えることができると述べた。また対人関係においても、白日夢や空想は適応的な機能を果たすとしている。白日夢経験のあまり多くない人や空想に注意を払うことのなかった環境にいた人々は、欲求不満の状態になったときに、空想の代わりに攻撃的な妄



想的思考がなされ、それが気分に影響し、特定の敵意に焦点を向けるようになる。しかし、空想を享受し、さまざまな環境でそれを利用することを身につけてきたような境遇の人は、侮辱や欲求不満を「心の中で」処理するなど、より楽しい空想活動に注意を向けるとしている。以上のように、Singer (1975 秋山・小山訳 1981) は、空想の機能について「世界への対処のための情報処理モデル」となる点を重視し (田中, 2008), 「自分の身の回りの世界とは別の次元の可能性を探索・模索しようとする創造的能力」であり、正常な人間の現象として、幼児期からさまざまな道筋を通して発達するうえで役立つ認知的機能であることを強調した。これを空想の「認知技能説」という。

### Personと空想

Person (1995 浅尾・岡訳 1997) は自身も精神分析や臨床心理学の立場に立ちながらも、精神分析家がFreudに倣い、未だに空想のネガティブな役割ばかりに焦点を当て、神経症の症状を引き起こす無意識的空想の素材の探求に焦点を当てていることや、意識的空想とそれらが果たす数々の積極的な適応機能はほとんど無視されていることについて批判している。そして従来の精神分析家とは異なり、意識的空想について焦点を当てて研究を行っている。Person (1995 浅尾・岡訳 1997) は空想という行為を想像活動の一種とみなし、客観的現実の問題解決につながる実用的な科学的思考とは異なり、むしろ主観的な心的生活とその感情調節に貢献する性質を有している想像活動であるとしている。一方で、「空想の目標をこのように表現すれば空想を想像思考全般と区別することができるが、その境界線ははっきりしない場合がある」とも述べている。そして、Freudによる最初の理論化とその後の精神分析学によって加えられた修正の両方を考慮に入れながら、意識的空想を「意識の流れに浮かび上がる白日夢であり、感情や思考、内的対話、そして (主に視覚的な) 感覚印象を合成した物語」と定義し、空想の目標を「精神状態を全面的に変えること—感情を変化させること」と述べた。これが空想の「感情調節機能説」である。

### 1-3. 本論文における空想の定義

本論文では空想と白日夢は区別せず扱い、Singer (1975 秋山・小山訳 1981) とPerson (1995 浅尾・岡訳 1997) の空想の定義を採用し、空想を「自分自身のある基本的な身体的・精神的課題から注意をそらし、内部刺激によって生じた一連の私的な反応に注意を向ける行為であるが、科学的思考とは異なり、心理面や感情面での目的に貢献する性質を有しているもの」と定義する。

## 2. 空想傾性研究

第1節では空想という「行為」およびその機能について説明したが、本節以降は空想をし

やすい「パーソナリティ特性」, すなわち, 「空想傾性 (fantasy proneness)」について取り上げる。

## 2-1. 空想傾性とは

空想傾性 (fantasy proneness) とは, Wilson & Barber (1981) の催眠感受性研究の中で発見された, 極めてリアルで鮮明なイメージの想起, 空想への深い没入, 幼少期の鮮明な記憶, イメージによる身体反応, 現実と空想の区別の困難さなどによって特徴付けられる人格特性ないし認知特性であり, 空想傾性の高い人々は人口の4%に見られるとされているが, 日本における基礎資料などは報告されていない。

### 幼少期の体験

Wilson & Barber (1983) の調査によると, 空想傾性者たちの幼少期は (a) 親などの重要な大人から空想をすることを促進されていた, (b) 芸術的な習い事など空想に貢献するような特別な環境に置かれていた, (c) 孤立していて孤独であったために空想をしていた (d) 虐待など望ましくない環境から逃避するために空想していたという4つの型のうち, 2つ以上の型を併せ持っていることが明らかになっている。

### 空想傾性を測定する質問紙

空想傾性はWilson & Barber (1981) の面接調査によって発見された特性であるが, その傾向を測定するために現在使用されることが多い質問紙は以下の2つである。当初, 空想傾性の研究ではWilson & Barber (1981) によって作成されたInventory of Childhood Memories and Imaginings (ICMI) という103項目からなる尺度やその短縮版のICMIが使われていた (e.g. Lynn & Rhue, 1988)。しかし, Merckelbach, Horselenberg, & Muris (2001) によると, ICMIは扱う項目の種類が雑多であり, 二分法にて測定するため, 統計的結果をまとめることが困難であるという問題点があった。そのため, Merckelbach et al. (2001) はより簡便に空想傾性を測定するための質問紙としてCreative Experience Questionnaire (CEQ) を作成した。CEQは健常者の幻聴体験や解離体験を説明する上で重要な指標になることが示されており (e.g. Merckelbach & Van de Ven, 2001; Van de Ven & Merckelbach, 2003; Merckelbach, Horselrmborg & Schmidit, 2002; Muris, Merckelbach, & Peeters, 2003), 本邦では岡田・松岡・轟 (2004) によって日本語版CEQ (CEQ-J) が作成されている。また, 近年では問題解決や創造性など空想傾性がもたらす有益な効果について焦点を当てた質問紙 (e.g. the Fantasy Questionnaire; Weibel, Martarelli, Häberli, & Mast, 2018) や想像上の遊び友達のような空想傾性のある側面に特化した質問紙 (e.g. the Retrospective Childhood Fantasy Play Scale; Kirkham, Lloyd, & Stockton, 2019) など, ICMI やCEQの拡

張版ないし縮小版質問紙が開発されている。しかし、Merckelbach, Otgaar, & Lynn (2020) は、これらの指標は大規模な調査では未だ採用されていないため、統合失調症傾向や解離傾向などの他の指標とどのような関連を持っているかについてはほとんど明らかになっていないと指摘している。ICMIやCEQ以外の指標として、主に空想内容や空想活動の特徴を測定するための質問紙であるSinger & Antrobus (1963) のThe Imaginal Processes Inventory (IPI) や、それをGiambra (1980) が因子分析にて分類した9グループの因子から質問項目を採用した研究、IPIを日本語版にアレンジした近藤 (1978) の空想調査用紙、松井・小玉 (2001) の多面的空想特徴質問紙を用いた研究もある (e.g. 松下・村上, 2010; 飯田・成瀬, 2016)。これらの質問紙では、空想傾性者が実際に空想活動に従事する頻度や持続時間、空想する時の状況、空想内容や空想に対する認識などを尋ねる。空想傾性を全体的に測定するためには、ICMIやCEQに加えてこれらの指標を併用することが望ましいと考えられる。

### 空想傾性 (fantasy proneness) と空想傾向 (fantasizing tendency)

fantasy pronenessの邦訳については「空想傾性」の他に「空想傾向」と訳されることもある。松井・小玉 (2004) は従来の空想傾性研究がfantasy prone personを対象とした子供時代の空想を重視していることを問題視している。そして、自身の研究では幼少期体験を尋ねる項目を含むCEQではなく、Singer & Antrobus (1963) のIPIや近藤 (1978) の白昼夢調査用紙を基にした空想の内容、空想する状況、空想への認識など多面的に空想特徴を測定する質問紙 (松井・小玉, 2001) を用いており、一貫して「空想傾向 (fantasizing tendency)」という用語を使用している。しかし、その他の研究者間では研究する対象や使用する質問紙に関わらず、「空想傾性」と「空想傾向」という邦訳が混在している (e.g. 飯田・成瀬, 2016; 平田・岩永, 2017)。本来、「傾性 (prone)」という用語は「病気など好ましくないものへの傾向」を表す場合に用いる。本研究では、単に空想する傾向 (時間、回数またはそれらから測定されうるイメージ能力の高さ) など認知的側面に限定せず、健康と精神病理とのスペクトラムとして捉えることを基本とするため、中井久夫に倣い「空想傾性」という訳を用いることとする (Putnam, 1997中井訳 2001)。

### 2-2. 空想傾性研究

催眠感受性研究から始まった空想傾性は、記憶研究における目撃証言の文脈や (e.g. Hyman & Billings, 1998)、精神障害の文脈で研究が進められ、空想傾性は適応的側面と不適応的側面の両側面を有していることが明らかになっている。適応的側面として、Wilson & Barber (1981; 1983) は自身の研究における空想傾性者はほとんどが高学歴で社会的に認められる立場に立つなど感情の安定性や精神的健康の観点からの社会的適応性を報告しており、その他にも創造性 (Lynn & Rhue, 1986)、共感性 (Wilson & Barber, 1983)、創作活



動 (Singer & Singer, 1990), IQ及び創造的筆記能力 (Dunn, Corn, & Morelock, 2004) の高さとの関連が報告されている。一方, 不適応的側面として, 統合失調症傾向や解離傾向 (Merckelbach et al., 2001), 大うつ病 (Rauschenberger & Lynn, 1995), 妄想性障害や境界性人格障害などのパーソナリティ障害 (Rhue, Lynn, & Sandberg, 1992) など精神障害や悪夢想起頻度 (Levin & Fireman, 2001-2002 ; Rauschenberger & Lynn, 1995) との関連性が報告されている。このように従来空想傾性に関する研究について振り返ると, 幸福に関する側面よりも精神的苦痛に焦点を合わせた結果が多く報告されているように思われる。

しかし, 近年では空想傾性の高さがポジティブ, ネガティブどちらの側面に結びつくかは人格特性や認知特性など様々な媒介要因によって異なってくることを示唆されるようになった。例えば, 松岡・岡田 (2004) は媒介要因として神経症傾向の重要性を指摘しており, 空想傾性の高さが神経症傾向と結びついた者では解離傾向が強く, 悪夢をみる頻度が高いのに対して, それと結びつかない空想傾性者では明晰夢をみる頻度が高くなることを報告している。また, 松岡・堀毛 (2006) の研究からは, 神経症傾向が低い群では空想傾性はwell-beingと自尊感情を高める効果をもつが, 神経症傾向が高い群では逆に空想傾性はwell-beingを低減させる効果があることが確認されている。さらに, 空想傾性の機能に影響を与える他の媒介要因として, 対処スタイルや統制の位置 (Locus of Control) について検討がなされている。松井・小玉 (2002) は問題志向型対処と情動志向型対処というストレスに対する2種類の対処様式のうち, 問題志向型の対処に空想を利用することで心的動揺を抑制することができることを報告している。目の前の課題や問題に対して積極的に向き合い, ポジティブな方向に空想を利用した場合は, ストレスや絶望感を調整するが, 逃避や回避など消極的な方向に利用すると病理的側面に結びつくという結果は, 他の研究でも報告されている (e.g. O'Connor, O'Connor, O'Connor, Smallwood & Miles, 2004 ; 平田・岩永, 2017)。Cuper & Lynch (2009) も空想傾性と抑うつ傾向との関連性における統制の位置と回避型対処スタイルの影響について, 健常な大学生を対象にICMIを用いて検討したが, この研究では空想傾性が抑うつ傾向と結びつく要因は回避型対処スタイルではなく, 統制の位置であるということが示された。外的統制が強い群では空想傾性が高いほど抑うつ傾向が高くなるのに対して, 内的統制が強い群では空想傾性の高さは抑うつ傾向に影響を及ぼさないという結果が報告されたのである。このCuper & Lynch (2009) の研究と類似した結果が山崎 (2019) からも報告されている。山崎 (2019) は「フロー体験 (flow experience)」が空想傾性と類似した没入特徴を持つ概念であることに注目し, 空想傾性とフロー体験との関連性について検討した。フロー体験とは Csikszentmihalyi (1975 今村訳 2000) によって提唱された「全人的に行為に没入している時に人が感ずる包括的感觉」であり, 「深く没入しているので他の何ものも問題とならなくなる状態, その経験それ自体が非常に楽しいので純粋にそのことをするために多くの時間や労力を費やすような状態」を指す (Csikszentmihalyi, 1990 今村訳

1996)。空想傾性と内的統制感がフロー体験およびwell-beingに与える影響について、健全な大学生を対象にCEQ-Jを用いて調査した結果、空想傾性および内的統制感が高い人ほどフローを多く体験し、空想傾性が高くかつ外的統制感が高い人はフローを体験しにくいこと、空想傾性が低ければ統制の位置はフロー体験に影響を与えないことが示された。さらに、空想傾性と内的統制感がフロー体験に影響を与えることでwell-beingを促進するという因果モデルが作成されている（山崎，2019）。このように自己コントロール感の強さもまた、空想傾性の方向性を左右する重要な変数であることが示されている。この研究以外にも近年では空想傾性のポジティブな機能に着目した研究が登場しており、例えば飯田・成瀬（2016）によって精神的健康や創造性に結びつく空想傾性を測定する質問紙の作成も試みられている。

しかし、空想傾性研究は研究の観点だけでなく測定方法についても問題が指摘されている。これまで紹介した先行研究も例にもれず、ほとんどの空想傾性研究は自己報告式の質問紙を用いている。空想という行為は極めて私的で主観的な行為であるため、他者が直接観察して測定することが困難であることから、これまでは行動学的な空想傾性研究が不足していた。そこでCuper（2010）は古典的な白昼夢研究ならびに近年のマインドワンダリング研究における測定手法に着目し、健全な一般成人75名を対象に注意持続課題（Sustained Attention to Response Task / SART；Robertson, Manly, Andrade, Baddeley, & Yiend, 1997）を用いて空想傾性の実証的な測定を試みた。SARTによる測定結果とCEQとの対応関係について調査した結果、CEQによって自己報告された空想傾性は、観察可能な行動にも影響を与える特性であることが示され、SARTのように実験的な環境でも測定することができることが明らかになった。

このように空想傾性研究は、従来の疾病モデル的観点から脱却し、健康生成モデル的視点からの空想傾性のポジティブな側面について実証的な研究も行われるようになってきたものの、その数は多いとはいえない。また、実験室での注意持続課題における測定結果は生態学的妥当性の低さという課題を排除することはできない。そのため、今後の研究では空想傾性が精神的健康や幸福感などの適応的な側面に結びつくような要因の検討とともに、Cuper（2010）が提案しているようなEMA（生態学的瞬間評価）による測定も併行した調査の蓄積が望まれる。

### 3. 近接領域（没入，解離，感覚処理感受性）

Cuper（2010）は空想傾性の実証的測定のために空想傾性と類似した現象であるマインドワンダリングの研究手法を活用したが、空想傾性と類似した様相を示す近接領域として、没入、解離、感覚処理感受性などが挙げられる。

### 3-1. 没入

空想傾性と同様に催眠感受性研究の中で提唱された概念として「没入性 (trait absorption)」がある。Tellegen & Atkinson (1974) は「風景、音楽、人間、過去の記憶などの表象に全ての注意が向けられる傾向」を没入性 (trait absorption) と呼んだ。また、Hilgard (1965) は (a) 感覚体験への高い親和性、(b) 子ども時代の高い空想能力、(c) 読書やドラマへの没入などの催眠感受性の高い人々に共通する特徴をまとめて「想像活動への関与 (Imaginative Involvement)」と名付けた (小山内・楠見, 2013)。

#### 没入を測定するための尺度

没入を測定するための尺度として、没入尺度 (TAS; Tellegen & Atkinson, 1974) がある。また、想像活動への関与の指標については、Hilgard (1979) が測定時に用いた方法は面接法であったため、Davis, Dawson, & Seay (1978) や Swanson (1978) によって簡便に測定する質問紙が開発されている。本邦では笠井・井上 (1993) がこれらの研究を参考に「日本版 Imaginative Involvement Inventory (III)」を作成し、催眠感受性やイメージの鮮明性などとの関係を明らかにしてきた。これらの催眠感受性研究から分岐した2つの没入概念は、呼称とそれが示す内実は少し異なるものの、「イメージへの没入傾向」という点で空想傾性と共通していると考えられている (大宮司・芳賀・笠井, 2000)。笠井・井上 (1993) は、空想傾性や没入性がそれぞれに関する多くの体験の幅広さを問題としているのに対し、想像活動への関与を測定するIIIは、物語を見聞きしたり空想したりするなど、没入の体験を意図して楽しむ側面を中心として、それに関与する程度ないし深さを測定するための尺度であるとしている。そして、岡田他 (2004) は空想傾性を測定するCEQは、IIIのような健康的な側面とともに次に説明する解離性体験のような病的な側面の両方を含んでいると述べている。

#### 空想傾性との関係性

Merckelbach et al. (2020) は、2000年から2018年までの空想傾性研究を収集しメタ分析を実施した。空想傾性との相関効果量を算出した結果、TASによって測定された没入性に対し、高い正の効果量が示された ( $r=.64$ )。また、想像活動への関与との相関については岡田他 (2004) によって、CEQとIIIとの間に中程度の正の相関関係 ( $r=.55$ ) が報告されている。

### 3-2. 解離

解離 (dissociation) とは「通常は他の心的過程と結びついているはずの、思考・感情・知覚・行動・記憶などの心的過程やその一部が切り離されて、意識や想起あるいは意志の統

制の及ばないものとなり、一時的にあるいは継続的に人格の統制が失われる」状態を指す（田辺，1994）。解離は健常者も日常生活の中で体験し、適応的な機能も持つことが指摘されている「意識の破綻」や「意識変容」に関する幅広い概念である。しかし、元来はPTSDや多重人格障害などとの精神病理との関係で検討されてきた現象である（松岡・岡田，2004）。中核症状としては（1）健忘（自分の経験した内容が忘却されてしまう）（2）離人（自分自身に対する非現実的感覚）（3）離隔（周囲世界が非現実的であるという感覚）（4）同一性混乱（自らの同一性についての不確実さ，困惑，葛藤）（5）同一性変容（異なった同一性あるいは自我状態が客観的行動の表出する）などが挙げられる（Steinberg, 1995）。一般人口における解離性障害の発現頻度は、北米で約2—3%，欧州で4—8%とされている。日本ではこのような調査は行われていないため、日本国内の頻度は不明であるとされている（柴山，2007）。

### 解離性体験を測定する尺度

解離の概念について最初に提唱したのはP. Janetであり、ヒステリー性の様々な障害の背景にある心的規制としてこの概念を提起した。このP. Janetの提唱した概念をdissociationと英訳したのがW. Jamesであり、解離の適応性について積極的に注目し解離を連続体モデルとして捉え、「解離性体験尺度DES (Dissociative Experiences Scale)」を開発したのがBernstein & Putnum (1986) である。日本では田辺 (1994) による日本語版DESが広く用いられている。笠井・井上 (1993) は、田辺 (1994) による日本語版DESは病的なものを含む日常生活の中での自発的な解離の体験を問題としていると指摘しており、比較的軽度で健康的な解離体験を測定するための尺度として舩田・中村 (2005) が開発した「日常的解離尺度」もある。

### 空想傾性との関係性

解離性障害と幼少期の性的外傷，虐待，養育放棄との関連について既に多くの報告がなされているが，Wilson & Barber (1981; 1983) による一部の空想傾性者の幼少期の体験報告と重複している。柴山 (2017) は、幼少期の空想傾性はより素朴でポジティブである種の願望的充足的なファンタジックな色彩を持っているのに対し，自身の解離性障害患者の幼少期体験は予知感，気配過敏，既視感，離隔などによって特徴付けられており，恐怖や怯えの色彩を帯びていると述べている。

Lynn, Rhue, & Green (1988) の報告以降，Roueshenberger & Lynn (1995) やMerchelbach, Muris, & Rassin (1999) など数多くの研究者たちによって，空想傾性と解離傾向との関連性について検討され，解離傾向と空想傾性の相関係数は0.41—0.63と報告されている (e.g. Silva & Kirsh, 1992; Merchelbach et al., 1999; Pekala et al., 1999)。このことから，逆境



(adversity) と呼ばれるような現実世界からもたらされる傷や苦痛とは全く対極に位置する空想への逃避や没入の一つのあり方が空想傾性であるという考察もできる。しかし、Merckelbach et al. (2002) が健常な大学生を対象に質問紙調査を実施し、解離傾向、空想傾性、認知的失敗 (cognitive failure)、幼少期のトラウマ体験の関係について共分散構造分析によるモデル化を試みたところ、興味深い2つのモデルが得られたのである。1つは従来から想定されていたモデルで、トラウマが解離を引き起こし、それが空想傾性や認知的失敗を引き起こすというものであった。そしてもう1つが解離が空想傾性と認知的失敗を引き起こし、それがトラウマの報告に作用するというモデルであり、後者のモデルの方が適合性が高いというものであった。また、中村 (2003) は日常生活における解離の適応的側面に焦点を当て、悪い意味で捉えられていた退行、分割や投影同一化が柔軟性、共感力、コミュニケーションの源泉として発想が転換されたように、解離は空想力および幸福感の源泉となりうると主張している。このように空想傾性と解離との間には関連性が認められることは確かであるが、解離性障害が発生するような劣悪な環境やトラウマを引き起こすエピソード以前から空想傾性が顕在していたのか、そのような逆境を背景として空想傾性が発展していったのかについては未だに明らかになっておらず、現在でも空想傾性と解離性体験や解離性人格障害の因果関係について多くの議論が交わされている。

さらにMerckelbach et al. (2020) が実施したメタ分析からは、解離傾向に対する相関の効果量は高いのに対し ( $r=.52$ )、自己報告による幼少期のトラウマ体験との間には有意な相関関係は見られるものの、その効果量は小さいという結果が示された ( $r=.10-.27$ )。このことから、空想傾性と解離傾向の関係性について自己報告された幼少期のトラウマ体験だけで説明することは難しく、むしろ空想傾性とトラウマ体験は独立して存在していると考えられる。これらの結果は、Wilson & Barber (1983) が報告した空想傾性者の幼少期体験のうち、逆境体験を経由しないルートが存在を支持すると思われる。今後は適応的な解離との関連性についても視野に入れ、空想傾性と逆境体験に限定しない幼少期の養育環境および解離間の因果関係についての検討が望まれる。

### 3-3. 感覚処理感受性

没入や解離のほかに空想傾性と重複する特徴を持つ特性として、近年ではAron & Aron (1997) が提唱した感受性の高さ (感覚処理感受性 / Sensory - Processing Sensitivity) に関する研究が注目を浴びている。感覚処理感受性とは、感覚器自体ではなく感覚情報の脳内処理過程における生得的な個人特性である。この感覚処理感受性が高い人々はHighly Sensitive Personと呼ばれ、些細な刺激に敏感であり、刺激過剰になりやすく、新奇刺激に対して次の行動を決める前にこれまでの経験と照合し、確認する傾向を持つと考えられている。また、このような感覚処理感受性の高い人々は、人口の約15—20%に存在するとされて

いる (Aron & Aron, 1997)。

### 感覚処理感受性を測定するための尺度

感覚処理感受性は、(a) 情報の認知的処理の深さ、(b) 過剰な刺激の受けやすさ、(c) 感情反応の強さ及び共感力の高さ、(d) 環境の機微への優れた察知能力という4つの要素によって決定される (Aron, Aron, & Jagiellowicz, 2012)。このような感覚処理感受性を測定するために、Aron & Aron (1997) は、質的な面接調査と無作為抽出による一般電話調査、そして5つの量的な質問紙調査をアメリカの大学生を対象に実施し、得られた結果をもとに27項目のHighly Sensitive Person Scale (HSPS) を開発した。以降、本尺度は欧米を中心に広く用いられているが、HSPSの因子構造は一次元構造であるという主張 (Aron & Aron, 1997) と二次元ないし三次元構造であるという主張 (e.g. Evans & Rothbart, 2008; Smolewska, McCabe, & Woody, 2006) が混在しており、因子構造については未だ十分に確定されていない。ただし、複数の下位因子の背景により高次の構成因子が存在している可能性も想定される。本邦では高橋 (2016) によって日本語版HSPSが作成されており、今後の研究において国際間での比較検討が望まれる。

### 空想傾性との関係性

この感覚処理感受性の高い人々は、悪夢を含む高い鮮明性を伴う夢見、身体的・感情的苦痛の感じやすさ、豊かな想像力及び共感力、想像上の遊び友達の存在、胎児記憶などといった主観的体験や特徴を持っており (e.g. Aron, 1996; 長沼, 2016)、これらの特徴は空想傾性者と重複している。しかし、感覚処理感受性と空想傾性との関係性についてはまだ明らかになっていない。

## 4. 従来の包括概念および理論的枠組み

上記以外にも、Green & Brock (2000) による社会心理学の領域における物語 (narrative) の説得や態度変容に焦点を当てた「物語世界への移入 (Transportation)」や、Thalbourne (2000) の提唱する「超境界性 (Transliminality)」といった概念もまた空想傾性と類似した様相を示している。これらの近接した現象ないし心理特性を包括する概念として、「心的境界理論」が、そして関連する精神病理的症状を理解するための理論的枠組みとして「素因—ストレスモデル」が提唱されてきた。

### 4-1. 包括概念—心的境界—

Jawer (2005) はこれらの多岐にわたる特性は、Hartman (1989) の提唱する“境界

(boundaries)” という概念に包括されると主張している。Hartmann (1989) は、悪夢に悩まされる人たちに対する治療や一連の研究の中で、彼らが「特に感受性が強く、経験への開放性が高く、傷つきやすい」という特徴が共通していることを発見した。これらの共通特徴について、情報や刺激を区別するためのバリアや壁が薄いという見解から、彼らを “thin boundaries (境界の薄い人たち)” と呼んだ。そして Hartmann (1991) は、このような境界の構造 (厚さ-薄さ) を “boundary in the mind” (心的境界) と名付け、パーソナリティの個人差を説明する概念として提唱した (Hartmann, 1991)。

#### 心的境界を測定するための尺度

Hartmann (1991) は心的境界を測定するために、境界尺度 (Boundary Questionnaire: BQ) を開発した。全138項目からなる本尺度は知覚的境界、思考・感情的境界、意識状態の境界 (睡眠時の夢見から覚醒時の思考までの関係性)、身体像的境界、対人関係における距離感や周囲の環境に対する好みなど様々な種類の境界を扱っているが、HSPSと比較すると特に内的な想像活動、夢見や意識状態について尋ねる項目が充実している。またBQは様々な研究領域で使用されており、その研究の目的や用途にあわせて簡便に測定するための短縮版や改訂版が開発されている (e.g. Scredl, Bocklage, Engelhardt, & Mingeback, 2009)。本邦では児玉 (2013) によって日本語版BQが作成されている。

#### 4-2. 理論的枠組み—素因—ストレスモデル—

これまで様々な精神病理的な側面を捉えるために、素因—ストレスモデル (Diathesis-stress model) という理論的枠組みが重視されてきた。素因とは、感情的苦痛 (affect distress) を生じさせる、またはその苦痛を感じやすい特性を指す。このようなパーソナリティを持った人が状態要因であるストレスないし感情的な負荷 (affect load) がかかると、精神病理的な症状が現れるという考え方である。Levin & Nielsen (2007) は、悪夢を形成する素因の一つとして空想傾性を挙げている。つまり、素因—ストレスモデルでは、空想傾性という素因を持った人々がストレスフルな状況下に置かれると、悪夢や不眠などの精神的な不健康な症状を呈すると考えられている。また、柴山 (2007) も外傷体験から発生することの多い解離について、「同じ出来事によっても大きく影響を受ける人もいれば、それをさほど大した衝撃と感ぜない人もいる。そのため、外傷やストレスだけでなく、ストレスや外傷を受ける側面側の要因や脆弱性といった素因についても注目し、全体的にとらえる必要がある。」と述べている。このように悪夢に限らず、解離について理解する場合にも素因—ストレスモデルは重要視されている。しかし、Carr & Nielsen (2017) は素因—ストレスモデルは精神病理学に由来しているため、焦点が病理的な症状やストレスに偏重しており、個人が潜在的に持つポジティブな状況下における適応的な側面については捉えることができ

ないと指摘している。そのため、適応的な側面と不適応的な側面の両面を有している空想傾性を理解するには、素因－ストレスモデル理論では不十分であると考えられる。そこで本論文では、今後空想傾性を理解するための新たな理論的枠組みとして、以下の仮説を提案したい。

## 5. 空想傾性を包括する新たな理論的枠組みの提案—感受性差仮説—

感受性差仮説 (Differential Susceptibility hypothesis) は、Belsky & Pluess (2009) が素因－ストレスモデルを発展させ、別の解釈を加えながら提唱した理論である。素因－ストレスモデルでは、主にネガティブなものに対して敏感なグループに焦点を当てるのに対し、Belsky & Pluess (2009) はネガティブなものに限らずポジティブなものに対しても敏感なグループが存在するとし、素因－ストレスモデルではポジティブな環境や適応的な結果に対する感受性について考慮することができないと指摘している。Carr & Nielsen (2017) は、これら2つのモデルは相対する概念ではなく、ストレスフルな環境における個人が持つ特有の脆弱性と病理に結びつくような不適切なストレス反応への言及については一致しているが、感受性差仮説は適切なサポートを受けられる環境下でのポジティブな結果と結びつくような感受性についても包括すると考え、感受性が乏しい人々はストレスに対するレジリエンスだけでなくポジティブな結果を含め、環境に影響を受けることが比較的少ないと述べている (図2)。

先述の通り、Jawer (2005) は空想傾性、没入そして感覚処理感受性を包括する概念として心的境界を挙げたが、Aron (2019) は感覚処理感受性を理解するための理論的枠組みについて、Hartmannの提唱する心的境界は取り扱う範囲が広範であり、かつ包括的すぎるため、境界にバリエーションがある理由について十分に説明し切れていないと指摘し、感受性差仮説を重要視している。Aron (1996) は感覚処理感受性は感受性差仮説と一貫した遺伝的特性と考えており、HSPはストレスの多い困難な環境ではうつや不安になりやすいが、逆にその特性が理解されサポートを受けられる環境では非HSPよりも健康に育つことができるとし、HSPにとっては周囲の環境、サポートが非常に重要であると主張している (Aron & Aron, 1997)。そして実際に、そのような考えを裏付けるような感覚処理感受性の ‘for better and for worse’ な側面を示す研究結果も報告されている (e.g. Jagiellowicz, Aron, & Aron, 2016)。

さらに、悪夢障害をとらえるための枠組みとしても感受性差仮説が近年注目されている (Carr & Nielsen, 2017)。悪夢想起頻度の多さや悪夢によって引き起こされる精神的苦痛などの様相は空想傾性者にも多く見られるため、感受性差仮説は空想傾性を理解するための重要な枠組みとなりうるであろう。そして、これまで紹介してきた概念の中でも特に感覚処理



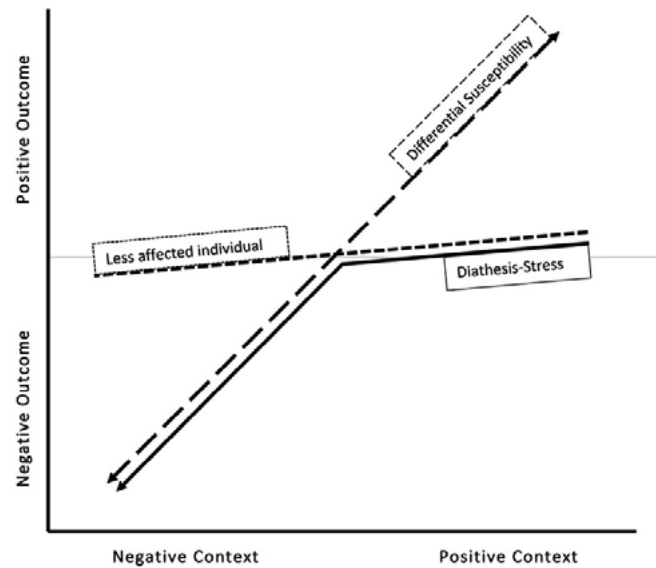


図2 素因-ストレスモデルと感受性差仮説 (Carr & Nielsen (2017) より引用)

感受性と心的境界の内容の記述が重複しているが、感覚処理感受性が神経科学的な基盤を持ち (e.g. Homberg, Schubert, Asan, & Aron, 2016; Acevedo et al., 2014), 十分な検証可能性を備えているのに対し、心的境界は悪夢想起における現象学的な報告に基づいた人格特性に対する説明にとどまっている。そのため、これらの概念における実証的な比較研究はほとんど見られず、両者の相違についてはまだ明確になっていない。両者の概念を整理した上で、空想傾性と感覚処理感受性の対応関係について吟味することが、今後の空想傾性研究の課題となるであろう。

## 6. まとめと展望

空想傾性は催眠感受性研究から分岐し、目撃証言などの記憶研究や精神障害研究の文脈で取り上げられ、精神的健康や幸福感などの適応的な側面よりも病理的な側面との関連性に焦点を当てられることが多かった。しかし、近年では空想傾性と精神的健康との関連について再度着目されるようになり、結びつく方向性を左右する媒介要因について検討する研究も行われるようになってきている。一方、空想傾性研究には問題意識以外にもいくつかの課題が残されている。まず、空想傾性とは何かという概念問題である。例えば、空想傾性者の幼少期体験の報告から空想傾性の発生機序に関わる後天的要因についてはある程度明らかになっているものの、先天的要因についてはほとんど明らかになっていない。このような課題を克服するために、まずは空想傾性を含めた近接領域の概念について改めて整理し、それぞれ比較する必要があるだろう。Merckelbach et al. (2020) はメタ分析の結果から、空想傾性との高い相関が報告された変数のうち、(a) 没入、(b) 統合失調症傾向、(c) 解離傾向、(d)

異常な睡眠体験（悪夢など）の4つを注目している。空想傾性の上位概念は性格特性Big Fiveにおける「開放性」であると考えられているが、統合失調症傾向は双極性障害と共に開放性の下位の階層に位置づけられ、これらは創造性とドーパミンの活性という「表現型」の特徴を共有しているとされている（Lo et al., 2017）。このことから、Merckelbach et al. (2020) は空想傾性と統合失調症傾向の生物学的関連性について精査する必要があると指摘している。統合失調症傾向と同様、空想傾性の発生機序に強く関連すると推測される感覚処理感受性も生物学的基盤を備えており、これらの関連性について検討するためには、空想傾性の特徴についても生物学的観点から明らかにする必要があるだろう。

次に研究方法の見直しまたは組み換えが要請される。空想傾性を測定する方法は自己報告に基づく面接法や質問紙法によるものがほとんどであり、我が国での発現頻度について未だ明らかになっていないことを含め、実証的データに乏しい。これまでの空想傾性研究では、面接法や質問紙調査に頼ることが多かったが、Cuper (2010) のような近年のマインドワンダリング研究の手法に倣い、注意持続課題やEMAを用いた測定などを適用することも考えられる。

また、感覚感受性差仮説的観点からの空想傾性者へのポジティブ心理学的介入も必要である。空想傾性者にもよく見られる様々な病理的症状改善のためのアプローチは、疾病生成モデルや素因-ストレスモデル的観点から行われることが多かった。一方、感覚感受性差仮説的観点では、ネガティブな文脈に限定した個人の特性や状況要因ではなく、ポジティブな文脈での個人の特性なども考慮することができる。

そこで、空想傾性の方向性を左右する媒介要因などを明らかにした上で、健康的な方向に結びつく特性を高めていくというポジティブ心理学的アプローチが有効となるであろう。例えば、媒介要因として着目すべき変数として、楽しさなどのポジティブな経験にマインドフルに注意を向け味わう「セイバリング (savoring : 満喫)」(Bryant & Verhoff, 2007) が挙げられる。堀毛 (2019) によると、セイバリングは単に楽しいことや満足することを意味するだけではなく、過去から未来に渡るポジティブな経験の記憶や予測を通じて、自分のポジティブな感情がコントロールできるとする信念と考えられている。これまでの研究では、空想傾性の方向性を決定づけるための媒介要因として、自己コントロール能力が重要な位置を占めていることが示唆されてきた (e.g. Cuper & Lynch, 2009 ; 山崎, 2019)。セイバリングという概念はまさに自己制御研究の中から導き出されたものであり、且つポジティブな文脈についても着目することから、空想傾性とセイバリング傾向の高さについて検討することは感受性差仮説という理論的枠組みからのアプローチにも合致すると思われる。さらに、セイバリングは介入方法もいくつか開発されており、いずれの技法も日常生活のポジティブ感情の促進や幸福感の上昇に効果があることが確認されている (堀尾 ; 2019)。このような媒介要因の検討によって、精神病理的な方向に進んだ空想傾性者が再び精神的健康の方向に向か

うためのレジリエンス要因が明らかになるであろう。そして、介入によって精神病理的苦痛の減少を確認することができれば、その高められた特性、すなわち精神病理的な方向に進んだ場合にも、自身を健康的方向に方向づけるコントロール能力は、生涯にわたる個人の強みや徳性に強く関わってくると考えられる。ポジティブ心理学との交流によってもたらされる可能性はそれだけではない。精神分析の理論においてもイメージは感情を喚起するとされているが、実証的研究においても感情増幅機能をもつことが知られており、イメージ機能が感情に影響を及ぼす作業モデルも提案されている (Holmes, Geddes, Colom & Goodwin, 2008; 松岡, 2010)。ポジティブ心理学的介入プログラムを導入し、空想傾性者が持つポジティブイメージやポジティブ感情をコントロールできるようになり、結果として精神病理的の症状の減少や精神的苦痛の軽減が認められたならば、イメージの感情増幅機能とFredricson (2001) が提唱した拡張-形成理論 (broaden-and-build theory) の相乗効果を確認することができるであろう。すなわち、空想傾性者が有する強いイメージ想起能力によって、ポジティブなイメージを自らの統制下において生成することができれば、ポジティブ感情の増幅につながり、ポジティブ感情の経験が思考・行為のレパートリーを拡張し、個人的資源が継続的・長期的に形成され、人間の健康、充実感、生命力そして成長につながり、循環していく可能性が考えられる。ポジティブ感情と同様にネガティブ感情のコントロール能力もまた重要である。例えば、困難な状況に直面した際、破局的な思考を緩和し冷静に己を客観視するスキルである「認知的統制」(杉浦, 2007) は着目すべき変数であろう。

適応的な側面と不適応的な側面という両面性を有する空想傾性がネガティブな性質を帯びた場合でも、ポジティブな方向へ自らを方向づける力を培うための介入検討は、個人の幸福感の向上にとどまらず、持続可能な社会の形成にも寄与すると考えられる。今後の研究では、多角的視点から空想傾性について改めて捉え直すことで、未だに明らかになっていることが少ない空想傾性への理解が促進され、豊かな知見が蓄積されることを期待する。

## 文献

- Acevedo, B. P., Aron, E. N., Aron, A., Sangster, M. D., Collins, N., & Brown, L. L. (2014). The highly sensitive brain: an fMRI study of sensory processing sensitivity and response to others' emotions. *Brain and behavior*, 4, 580-594.
- Aron, E. N. (1996). *The highly sensitive person: How to thrive when the world overwhelms you*. London: Thorsons.
- Aron, E. N. (2019). Graceful Boundaries - part1. The Highly Sensitive Person Retrieved from <https://hsperson.com/graceful-boundaries-part-i/> (2020/09/17).
- Aron, E. N., & Aron, A. (1997). Sensory-Processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 181-

- Aron, E. N., Aron, A., & Jagiellowicz, J. (2012). Sensory processing sensitivity: A review in the light of the evolution of biological responsivity. *Personality and Social Psychology Review, 16*, 262-282.
- Belsky, J., & Pluess, M. (2009). Beyond diathesis stress: differential susceptibility to environmental influences. *Psychological bulletin, 135*, (6), 885-908.
- Berstein, E. M., & Putnam, F.W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease, 174*, 727-735.
- Bryant, F.B., Verhoff, J. (2007). *Savoring: A new model of positive experiences*. N.J.: LEA.
- Carr, M., & Nielsen, T. (2017). A novel differential susceptibility framework for the study of nightmares: Evidence for trait sensory processing sensitivity. *Clinical psychology review, 58*, 86-96.
- Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond Boredom and Anxiety : Experience Flow in Work and Play*. Jossey-Bass.  
(チクセントミハイ, M. 今村浩明訳 (2000). 楽しみの社会学 新思索社)
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The Psychology of optimal experience*. Harper & Row.  
(チクセントミハイ, M. 今村浩明訳 (1996). フロー体験——喜びの現象学—— 世界思想社)
- Cuper, P.F., & Lynch, T.R. (2009). When is fantasy proneness associated with distress? An examination of two models. *Imagination, Cognition and Personality, 28*, 251-268.
- Cuper, P. F. (2010). *Investigating the Effects of Fantasy Proneness and Instructions to Fantasize* (Unpublished Doctoral dissertation), Duke University, Durham.
- 大宮司・芳賀・笠井 (2000). イメージへの没入性と性格および不安との関連 催眠学研究, 45, 24-29.
- Davis, S., Dawson, J.G., & Seay, B. (1978). Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis, 20*, 194-198.
- Dunn, L.W., Corn, A.L., & Morelock, M.J. (2004). The relationship between scores on the ICMIC and selected talent domains: An investigation with gifted adolescents. *Gifted Child Quarterly, 48*, 133-142.
- Evans, D. E., & Rothbart, M. K. (2008). Temperamental sensitivity: Two constructs or one?. *Personality and Individual Differences, 44*, 108-118.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American psychologist, 56*, 218.
- Freud, S. (1908). *Der dichter und das Phantasieren*.  
(道籐泰三・西脇宏・福田覚訳 (2007). フロイト全集 9 岩波書店)



- Giambra, L. M. (1980). A factor analysis of the items of the imaginal processes inventory. *Journal of Clinical Psychology, 36*, 383-409.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2000). The role of transportation in the persuasiveness of public narratives. *Journal of personality and social psychology, 79*, 701-721.
- Hartmann E. (1989). Boundaries of Dreams, Boundaries of Dreamers: Thin and Thick Boundaries As A New Personality Measure. *Psychiatric Journal of the University of Ottawa, 14*, 557-560.
- Hartmann E. (1991). *Boundaries in the Mind: A New Psychology of Personality*. New York: Basic Books.
- Hartmann, E. (2010). Meteorite or gemstone? Dreaming as one end of a continuum of functioning: implications for research and for the use of dreams in therapy and self-knowledge. *Dreaming, 20*, 149.
- Hilgard, E. R. (1965). *Hypnotic susceptibility*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Hilgard, E. R. (1979). *Personality and hypnosis: A study of imaginative involvement*. (2nd ed.) Chicago: University of Chicago Press.
- 平田久子・岩永誠 (2017). 空想傾向が心理的ストレス反応に及ぼす影響——ストレス対処の違いによるネガティブ・ポジティブ効果の検討—— 日本イメージ心理学会大会第18回発表論文集, 26.
- Holmes, E. A., Geddes, J. R., Colom, F., & Goodwin, G.M. (2008). Mental imagery as an emotional amplifier : Application to bipolar disorder. *Behaviour Research and Therapy, 19*, 1-8.
- Homberg, J. R., Schubert, D., Asan, E., & Aron, E. N. (2016). Sensory processing sensitivity and serotonin gene variance: Insights into mechanisms shaping environmental sensitivity. *Neuroscience & Biobehavioral Reviews, 71*, 472-483.
- 堀毛一也 (2019). ポジティブなところの科学——人と社会のよりよい関わりをめざして—— 安藤清志・松井豊 (編) セレクション社会心理学-31 サイエンス社
- Hyman, I. E., & Billings F. J. (1998). Individual differences and the creation of false childhood memories. *Memory, 6*, 1-20.
- 飯田あや・成瀬九美 (2016). ポジティブ機能に着目した空想傾性の分類. 奈良女子大学スポーツ科学研究, 18, 25-34.
- Jagiellowicz, J., Aron, A., & Aron, E. N. (2016). Relationship between the temperament trait of sensory processing sensitivity and emotional reactivity. *Social Behavior and Personality: an international journal, 44*, 185-199.
- Jawer, M. (2005). Environmental sensitivity: A neurobiological phenomenon? *Seminars in*

- integrative medicine*, 3, 104-109.
- 笠井仁・井上忠典 (1993). 想像活動への関与に関する研究——測定尺度の作成と妥当性の検討—— 催眠学研究, 38, 9-20.
- 川原正弘 (2017). 心的イメージを用いた認知療法的介入法に関する研究動向について イメージ心理学研究, 15, 25-30.
- Kirkham, J. A., Lloyd, J., & Stockton, H. (2019). Development and validation of the retrospective childhood fantasy play scale. *Imagination, Cognition and Personality*, 38, 315-344.
- 児玉恵美 (2013). 日本語版境界尺度 (JBQ) の作成および精神病理・創造性との関連の検討, 応用障害心理学研究, 12, 1-11.
- 近藤敏行 (1978). 青年期白昼夢 (空想) の構造に関する基礎的考察 広島大学学校教育学部紀要, 第一部, 第1巻, 11-21.
- 近藤敏行 (1986). 幻想と空想の心理学 ナカニシヤ出版
- Levin, R., & Fireman, G. (2001-2002). The relation of fantasy proneness, psychological absorption, and imaginative involvement to nightmare prevalence and nightmare distress. *Imagination, Cognition and Personality*, 21, 111-129.
- Levin, R., & Nielsen, T. A. (2007). Disturbed dreaming, posttraumatic stress disorder, and affect distress: a review and neurocognitive model. *Psychological bulletin*, 133, 482.
- Lo, M. T., Hinds, D. A., Tung, J. Y., Franz, C., Fan, C. C., Wang, Y., ... & Sanyal, N. (2017). Genome-wide analyses for personality traits identify six genomic loci and show correlations with psychiatric disorders. *Nature genetics*, 49, 152-156.
- Lynn, S.J., & Rhue, J.W. (1986). The fantasy-prone person: Hypnosis, imagination, and creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 404-408.
- Lynn, S. J., & Rhue, J.W. (1988). Fantasy proneness: Hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. *American Psychologist*, 43, 35-44.
- Lynn, S. J., Rhue, J. W., & Green, J. P. (1988). Multiple personality and fantasy proneness: Is there an association or dissociation? *British Journal of Experimental and Clinical Hypnosis*, 5, 138-142.
- 舛田・中村 (2005). 日常的解離尺度 (短縮6項目版), 日常的分割投影尺度 (短縮8項目版) の構成概念妥当性の検討 パーソナリティ研究, 13, 208-219.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2001). 多面的空想特徴質問紙作成の試み - 空想活動・認識・内容の分析 - 日本心理学会第65回発表論文集, 945.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2002). 空想傾向がストレスコーピングと精神的健康に与える影響. 筑波大学心理学研究, 24, 255-262.

- 松井めぐみ・小玉正博 (2003). 空想概念の多次元尺度構成法を用いた定義化 筑波大学心理学研究, 26, 229-233.
- 松井めぐみ, & 小玉正博. (2004). 空想の多面的特徴と精神的健康との関連. 健康心理学研究, 17, 38-46.
- 松岡和生 (2000). 心的イメージ 行場次朗・箱田裕司 (編) 知性と感性の心理 (pp.76-91) 福村出版
- 松岡和生 (2010). 空想傾性(Fantasy Proneness)のポジティブ機能 堀毛一也 (編) 現代のエスプリ ポジティブ心理学の展開 ——「強み」とは何か それをどう伸ばせるか—— (pp.48-59) ぎょうせい
- 松岡和生・岡田斉 (2004). 空想傾向(Fantasy Proneness)と悪夢, 明晰夢および解離性体験 日本心理学会第68回大会発表論文集, 362.
- 松岡和生・堀毛一也 (2006). 空想傾向(Fantasy Proneness)のポジティブ機能——主観的充実感と自尊感情に及ぼす効果—— 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1017.
- 松下姫歌・村上碧海 (2010). 空想への心的態度とフロー体験および精神的健康観との関係 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, 83-92.
- Merckelbach,H., Horselenberg,R., & Muris,P. (2001). The Creative Experiences Questionnaire (CEQ) : a brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and individual differences*, 31, 987-995.
- Merckelbach,H., Horselenberg,R., & Schmidt, H. (2002). Modeling the connection between self-reported trauma and dissociation in a student sample. *Personality and Individual Differences*, 32, 695-705.
- Merckelbach, H., Muris, P., & Rassin, E. (1999). Fantasy proneness and cognitive failures as correlates of dissociative experiences. *Personality and individual differences*, 26, 961-967.
- Merckelbach, H., Otgaar, H., & Lynn, S. J. (2020). Empirical Research on Fantasy Proneness and Its Correlates 2000-2018: A Meta-Analysis. *Psychology of Consciousness: Theory, Research, and Practice*,1-63.
- Merckelbach,H., & Van de Ven, V. (2001). Another white christmas: fantasy proneness and reports of 'hallucinatory experiences' in undergraduade students. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 32, 137-144.
- Muris, P., Merckelbach,H., & Peeters, E.(2003). The links between the adolescent dissociative experiences scale (A-DES), fantasy proneness and anxiety symptoms. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 191, 18-24.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) (1999) .

心理学辞典, 有斐閣

- 中村俊哉 (2003). 解離と分割についての覚書: 日常的な解離尺度, 空想対話尺度, 日常的な分割  
投影尺度の作成 福岡教育大学紀要, 52, 213-226.
- 長沼陸雄 (2016). 「敏感すぎる自分」を好きになれる本 青春出版社
- O'Connor, R., O'Connor, D., O'Connor, S., Smallwood, J., & Miles, J. (2004). Hopelessness,  
stress, and perfectionism: The moderating effects of future thinking. *Cognition &  
Emotion*, 18, 1099-1120.
- Oettingen, G., & Mayer, D. (2002). The motivating function of thinking about the future:  
Expectations versus fantasies. *Journal of personality and social psychology*, 83, 1198.
- 岡田斉・松岡和生・轟知佳 (2004). 質問紙による空想傾向の測定——Creative Experience  
Questionnaire 日本語版(CEQ-J)の作成—— 人間科学, 26, 153-161.
- 小山内秀和・楠見孝 (2013). 物語世界への没入体験 心理学評論, 56, 457-473.
- Pekala, R. J., Kumar, V. K., Ainslie, G., Elliott, N. C., Mullen, K. J., Salinger, M. M., & Masten,  
E. (1999). Dissociation as a function of child abuse and fantasy proneness in a  
substance abuse population. *Imagination, Cognition and Personality*, 19, 105-129.
- Person, E. S. (1995). *By force of fantasy: how we make our lives*. New York: Basic Books.  
(パーソン, E. S. 浅尾泰・岡正之訳 (1997). 人はなぜ空想するのか 翔泳社)
- Putnam, F. W. (1997). *Dissociation in children and adolescents.: A developmental  
Perspective*. New York: Guilford Press.  
(パトナム, F.W. 中井久夫訳 (2001). 解離——若年期における病理と治療—— みすず書房)
- Rauschenberger, S., & Lynn, S.J. (1995). Fantasy proneness, DSM- III Axis I  
psychopathology, and dissociation. *Journal of Abnormal Psychology*, 104, 373-380.
- Rhue, J. R., Lynn, S. J., & Sandberg, D. (1992). Fantasy Proneness and Personality Disorder.  
Unpublished manuscript, Ohio University.
- Robertson, I. H., Manly, T., Andrade, J., Baddeley, B. T., & Yiend, J. (1997). Oops!':  
performance correlates of everyday attentional failures in traumatic brain injured and  
normal subjects. *Neuropsychologia*, 35, 747-758.
- Seli, P., Risko, E. F., & Smilek, D. (2016). On the necessity of distinguishing between  
unintentional and intentional mind wandering. *Psychological science*, 27, 685-691.
- Schredl, M., Bocklage, A., Engelhardt, J., & Mingeback, T. (2009). Psychological  
boundaries, dream recall, and nightmare frequency: A new Boundary Personality  
Questionnaire (BPQ). *International Journal of Dream Research*, 2, 12-19.
- 柴山雅俊 (2007). 解離性障害 - 「うしろに誰かいる」の精神病理, 筑摩書房
- 柴山雅俊 (2017). 解離の舞台 症状構造と治療, 金剛出版



- Silva, C. E., & Kirsch, I. (1992). Interpretive sets, expectancy, fantasy proneness, and dissociation as predictors of hypnotic response. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 847-856.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1990). *The House of Make-Believe: children's play and the developing imagination*. Cambridge, M.A.: Harvard University Press.
- Singer, J.L., & Antrobus, J.S. (1963). A factor analytic study of daydreaming and conceptually-related cognitive and personality variables. *Perceptual and Motor Skills*, 17, 187-209.
- Singer, J. L. (1975). *The inner world of daydreaming*. New York: Harper and Row.  
(シンガー, J.L. 小山睦夫・秋山信道訳 (1981). 白日夢・イメージ・空想——幼児から大人までの心理学的意義 清水弘文堂)
- Smallwood, J., & Schooler, J. W. (2006). The restless mind. *Psychological bulletin*, 132, 946-958.
- Smallwood, J., & Schooler, J. W. (2015). The science of mind wandering: empirically navigating the stream of consciousness. *Annual review of psychology*, 66, 487-518.
- Smolewska, K. A., McCabe, S. B., & Woody, E. Z. (2006). A psychometric evaluation of the Highly Sensitive Person Scale: The components of sensory-processing sensitivity and their relation to the BIS/BAS and "Big Five". *Personality and Individual Differences*, 40, 1269-1279.
- Steinberg, M. (1995). *Handbook for the assessment of dissociation: A clinical guide*. American Psychiatric Pub.
- 杉浦知子 (2007). ストレスを低減する認知的スキルの研究 風間書房
- Swanson, G. E. (1978). Travels through inner space: Family structure and openness to absorbing experiences. *American Journal of Sociology*, 83, 890-919.
- 高橋亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77.
- 田辺肇 (1994). 解離性体験と心的外傷体験との関連 - 日本版DES (Dissociative Experience Scale) の構成概念妥当性の検討 催眠学研究, 39, 1-10.
- 田中史子 (2008). 白昼夢に関する研究——反復性・空想性を中心に—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 651-663.
- Tellegen, A., & Atkinson, G. (1974). Openness to absorbing and self-altering experiences ("absorption"), a trait related to hypnotic susceptibility. *Journal of abnormal psychology*, 83, 268-277.
- Thalbourne, M.A. (2000). Transliminality: A review. *International Journal of*

*Parapsychology*, 11, (2), 1-34.

- Van de Ven, V., & Merckelbach, H. (2003). The role of schizotypy, mental imagery, and fantasy proneness in hallucinatory reports of undergraduate students. *Personality and Individual Differences*, 35, 889-896.
- van Heugten-van der Kloet, D., Cosgrave, J., Merckelbach, H., Haines, R., Golodetz, S., & Lynn, S. J. (2015). Imagining the impossible before breakfast: the relation between creativity, dissociation, and sleep. *Frontiers in psychology*, 6, 1-8.
- Weibel, D., Martarelli, C. S., Häberli, D., & Mast, F. W. (2018). The fantasy questionnaire: A measure to assess creative and imaginative fantasy. *Journal of personality assessment*, 100, 431-443.
- Wilson, S.C., & Barber, T.X. (1981). Vivid fantasy and hallucinatory abilities in the life histories of excellent hypnotic subjects ("SOMNAMBLES") : preliminary report with female subjects. In E.Klinger (Ed.), *Imagery : concepts ,results ,and Applications*. (pp.133-149). Vol. II . New York & London: Plenum Press.
- Wilson, S.C., & Barber, T.X. (1983). The fantasy-prone personality: Implications for understanding imagery, hypnosis, and parapsychological phenomena. In A.A.sheikh (Ed.), *Imagery: Current theory, research, and application*. (pp.340-387). New York: John Wiley & Sons.
- 山岡明奈・湯川進太郎 (2019). 日本語版意図的/非意図的マインドワンダリング傾向尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *教育心理学研究*, 67, 118-131.
- 山崎有望 (2019). 空想傾性 (Fantasy Proneness) がwell-beingに与える影響——内的統制感およびフロー体験との関連性—— *イメージ心理学研究*, 17, 1-12.

# Overview and Prospects of Studies on Fantasy Proneness.

YAMAZAKI, Yumi

## Abstract:

Fantasy proneness is a concept that denotes a range of experiences considered to be related to deep involvement in fantasy. Fantasy-prone individuals spend much of their time fantasizing, focusing on a rich internal world of imaginary stories, vivid memories, and dreams. Most studies on fantasy proneness have used self-reported questionnaires, and suggested a relationship with psychopathologic disorders such as schizotypy, dissociation. However, little is known about the mechanism of fantasy proneness neither about innate factors nor ecological ones. In this study, to reconsider the concept of fantasy proneness, we reviewed the literature on fantasy research and studies on fantasy proneness, and then described some of the traits related to fantasy proneness, such as absorption, dissociation, and sensory-processing sensitivity. We proposed an alternative theoretical framework that complements the diathesis-stress model for understanding fantasy proneness. Finally, we discussed some problems in the current research and concluded with prospects for future fantasy proneness research.

Fantasy proneness has both adaptive and maladaptive aspects. Therefore, it is necessary to continue investigating the mediating variable that affects direction, and to clarify the factors that motivate a person in a positive direction if fantasy-prone individuals have advanced in a negative direction towards psychopathological tendencies.

**Keywords:** Fantasy Proneness, Boundary in the Mind, Differential Susceptibility, Positive Psychology